

大学出版

The Association of
Japanese University Presses

No.140

2024.11

秋

特集 読書会の魔力

読むことで始まり、読みながら終わる

—— 初心に返る場所 郷原佳以 1

—— ストレッチとしての読書会

—— 「沈黙読会」の試み 斎藤真理子 6

—— 読書会の中国近現代史 比護遥 12

—— 「師範」のいない読書会

—— その可能性と未来 三津田治夫 18

【連載】何年経っても忘れられない、編集者の一冊《15》

杉原 薫著

『世界史のなかの東アジアの奇跡』

橘 宗吾 表2

大学出版部ニュース 23

大学と社会を結ぶ
知のネットワーク

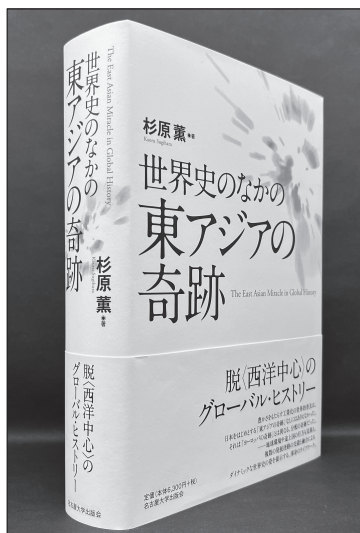


一般社団法人
大学出版部協会

杉原 薫著

『世界史のなかの東アジアの奇跡』

橘 宗吾（名古屋大学出版会）



「東アジアの奇跡」とは「ヨーロッパの奇跡」に対する広義のもの。それが分配の奇跡でもあったことや、地球環境への含意は、今後さらに重要になってくるだろう。第33回「アジア・太平洋賞」大賞を受賞。杉原先生の研究・執筆には秘書の方々の貢献も大きかった。コロナ禍の最初の年の出版となったが、逆にじっくり校正刷と向き合えた。名古屋大学出版会の1千点目の本として刊行できたこともうれしかった。

装幀：耳塚有里、印刷：亜細亜印刷 [名古屋大学出版会・2020年・A5判上製・776頁・定価6930円]

長い時間のかかった本である。二十年以上。おかげで著者の杉原薫先生からは本当に多くのことを教わった。いや、先生とその周りの方々、といったほうが正確だろう。日本、そしてアジアの経済発展を世界史のなかでどのように捉えるのか、そして未来をどう見通していくのか、という問題に関心をもつ多くの研究者や院生たちが、先生を一大結節点として活動していた（今もしている）。先生がかつて指導されて、研究者になった方も多い。

そのうちの特に親しい数人と先生と私で、本書の構想やテーマ、章立て、あるいは各段階での草稿について、検討会を何度ももった。著者自身を前にしての読書会のような感じだった。そのたびに多方向から出てくる意見と、それに応じて先生が語られる、文章の背後にある考えや方向性（それがまた文章化されていく）は、私にとっていつも新鮮で、その都度ついていくのが精いっぱいだったが、知というものの広大さを強烈に実感させるものだった。（先行研究を踏まえた分析的・実証的な学術書として限界に近い大きさの問題に取り組んだ）作品とは、この本に対する書評の言葉だが、その通りだと思う。「ああ、まだそこがうまく書けてないやな」「それをどう書いたらいいんかな」と自問しながら探究を深めていかれる先生の姿勢に心底敬服した。

だが、敬服しているだけではいい本はできない。だから、できるだけ勉強して（といっても高が知れている）、一生懸命草稿を読んで（これは当然のことだろう）、感じ考えたことを必ずお伝えした。それ以外の点は検討会の方々が言ってくれるし、私にはそれしかできなかった。すべて先生には先刻ご承知のことのように思え、敬愛する人から馬鹿だと思われるのはとても怖いことだったが、それでも自分のなすべき仕事はそこにあると考えて、それを繰り返した。そうして、どんどんと先へ進んでいかれる先生の探究を必死で追いかけて文章化していただき、一番いいところで書物の形にまとめあげること——それを目指して長い時間を走り、現在ある形になった。

読むことで始まり、読みながら終わる——初心に戻る場所

郷原佳以 (東京大学教授)

書くために読む？

人文系の研究を仕事としてしていると、つい、書くことがゴールになりがちになる。自分の定めたテーマに必要な資料を収集し、文献に目を通して解釈を行い、論文に仕上げ、学会等で発表する、あるいは学術誌や紀要等に提出する、そんな「書いて発表する」までの流れがワンサイクルとなり、それを重ねて研究成果を蓄積していくことが自然と目標になる。「書いて発表」にゴールが定められていると、調査や執筆という孤独な作業にモチベーションがでず、発表まで辿り着くと達成感も得られる。一回取り組んだテーマは次の研究でもう一度練り直し展開するにせよ、発表まで辿り着いたところでいったんこのテーマとはお別れとばかりに机に積み上げた本の山を書棚に戻す。そうしたことの繰り返しで安定した研究の道だという考えに慣れていく。

私は大学に勤務しており、研究室には研究者を目指す大学院生も在籍しているが、彼らにはゼミで発表を課し、修士論文や博士論文の計画を中間発表等で発表してもらい、論文草稿を何日までに送付するようにと促し、ときには学内紀要や学会誌の論文投稿について期日などの情報を伝える。投稿を目標にしておくことと研究のペースメーカーになるから、などと言ったりする。言いながら、それがアドバイスとして間違っていないことを知りつつ、若干の罪悪感を覚える。あるいは、そのような教師の自分にいささか嫌悪感を覚える。研究者としては、「書いて発表」は確かに必要だが、研究の動機は本当にそこにあっただろうかと自問するからだ。本当は、ただ読みたかったのではないかと。

ならば、研究者を指さない大学生には書くことを促さないかという点、必ずしもそうではない。大学には研究者ではなくとも批評家になりたいという野心を身体からにじ

ませた学生も少なくなく、いずれにせよ四年間の締めくくりには卒業論文を書くことが多いので、そのことを踏まえ、何らかの対象について「書ける」ように導くのが、個人としても所属コースとしても基本方針である。具体的な目標を持った若者たちはめきめきと力を付け、「書く」ようになっていく。

人生の先達に、学ぶことを学ぶ

こうしたことを意識しないで済むのは、大学外で講座などを担当させていただく機会にほぼ限られる。かつて、朝日カルチャーセンターで数年にわたり講座を担当させていただいたが、得がたい経験だった。準備の過程で自分の勉強になったということもあるが、大学と異なるのは、年配の方を中心とする落ち着いた聴講者たちの、穏やかな熱意に溢れた視線である。そこから感じられるのは、けっして野心ではない。会社や家庭での日中の仕事を終え、平日夕方からの講座に足を伸ばしてくださる方々は、片時も聞き漏らすまいというように集中して聴いてくださるのだが、それでいて、不器用な話を優しく微笑んで見守ってくださる人生の先達のようなだった。今でもその表情を思い出すことができる。彼らが講座に足を運ぶのは、そこで聴いたことを活かして何かを書くためではなく、純粹に、深く知りたいからだということが感じられた。愛着があるテキストが取り上げられていて、一人でも好んで読むのだが、一人

で読むときには気づかなかつたとところに気づかせてもらえるのではないか、テキストの折り畳まれた襞を別の読み方で開いてくれるのではないか、ただそのような期待のためだけに教室に足を運ぶ。仕事のためでも生活のためでもなく、しいて言えば、人生のために。

そうした「人生」について思うとき、いつも心に浮かぶ、きわめて繊細なエッセイがある。「途切れたままの雰囲気を保つこと」という印象深いタイトルをもった堀江敏幸氏の文章だ。二段構成になっていて、前半ではまさしく、堀江氏が勤務先の大学以外で講演などをするときに壇上から見える、お年を召した方々の様子が語られている。次のような観察には、一字一句首肯するしかない。

眼光は鋭い、と言ったけれど、ぎすぎすした印象はあまりない。勉強しよう、なにかを学び取ってやろうという気持ちはたしかにあり、だからこそ自分の意志でなんの役に立つのかもわからないような催しに足を運んできたださっているわけなのだが、そこで得たものをすぐべつの分野に応用したり、友人に自慢してやろうなどとは微塵も思っていない顔つきである。もちろん、これは私の思い込みにすぎないかもしれない。しかし、いやおうなく目に入ってくる聴き手のなかで、あとあとまで残るのは、そのような「老年」の方々の表情なのだ。(堀江敏幸『象が踏んでも』二〇一一年、中

こうした方々の表情が「あとあとまで残る」というのは、私の実感と照らししても間違いない。堀江氏の考察は、ここから、「学ぶ」ということに関する「老年」の方々のあり

よう、そして「ひ弱な中年」たる自分の彼らへの憧れへと進み、そこから、串田孫一の「ドン・キホーテと老人」というエッセイの紹介へと移る。堀江氏の語りの構成は、心憎いまでに見事だ。というのも、「ドン・キホーテと老人」でも、語り手の「私」がある老人について語っており、「私」はその老人から「学ぶことを学」ぶからである。つまり、まず、講演会場で、「学ぶ」ことがまるで空気を吸うに等しい行為である「ような「老年」の人々に接し、「頼もしく」思った「中年」の堀江氏は、かつて読んだ串田孫一のエッセイにおける「老人」を想起する。そして自らのエッセイの締めくくりに、「そして私はこの老人から学ぶことを学んだ」という「ドン・キホーテと老人」の結びの言葉を引く。そして間髪を入れず、「私もまた、いまになって、老人から学ぶことを学んだ語り手に学ぼうとしている」と続けるのだ。堀江氏のエッセイは、このような入れ子状の構成になっており、だからそれを読む読者は自然と、「老人から学ぶことを学んだ語り手に学ぼうとしている」語り手から学ぶよう誘われる。とりわけこの原稿の筆者、つまり、かつてカルチャーセンターで年配の聴講者たちから向けら

れた柔和な眼差しを思い出し、それと同時に堀江氏のエッセイにおける「老年」の方々の学び、そしてそれを通して串田孫一の「老人」の学びを思い出している「ひ弱な中年」、いや「中高年」の筆者はいま、学ぶことの先達に三重に学ぶべく誘われている。

先に「人生」というやや大仰な言葉を用いた。それは、筆者がかつてのカルチャーセンターの教室の光景から想起した堀江氏のエッセイ、そしてそのなかの「ドン・キホーテと老人」が、中年から老年を人生の先達として眺めるという形になっており、そのときそこに「死」の問題が入ってこざるをえないからである。というより、死をどのように生きるかという問いである。そして「ドン・キホーテと老人」はこの問いに、いわば問い自体を無効にする形で答えている。それは、堀江氏のエッセイのタイトル「途切れのままの雰囲気を保つこと」に現れている。どういうことか。「ドン・キホーテと老人」の老人は、人生で何事かを達成してから死ぬ、というような展望で生と死を分けることがいつさいない。彼は「途切れたままの雰囲気」で旅立つ。この老人は、会社勤めをしたのち定年退職し、不治の病に冒された。とはいえ気力は充実していて、一時退院の折には語り手を招き、読んだ本の話などをする。やがて再入院した彼を語り手が見舞いに行くと、枕許に「ラジオのスペイン語講座のテキストと辞書が置いてあった」。老人は語り手に、『ドン・キホーテ』の原書を買ってきてほし

いと頼む。語り手は急いでそれを入手し、届ける。読みさしの『ドン・キホーテ』の原書を残して、老人は亡くなる。その報せを受けて、語り手は、「学ぶという営みの、その途切れたままの雰囲気」が妙に貴く思われた」と記す。堀江氏はこの言葉を繰り返して噛みしめた末に、エッセイを書いた。

この老人の「人生」から学ばれることは、それが、そのなかで何かの結果を形にしなければならぬようなまとまりではないということ、生と死の境はむしろ、終わりなく続く学ぶこと、読むことの中に生じるだけだということである。まるで学ぶ営み、読む営みの方がひとりの人の人生よりも長いかのように。しかし、学びうることの膨大さ、生み出されてきたテキストの無限の拡がりさえ思えば、ひとりの人の一生などそのテクスチャーに包み込まれてしまってもおかしくはない。会社員であったこの老人にとって、若い頃から続けられていた学ぶこと、読むことは、その結果が具体的な成果物に現れるようなものではなかった。現れるとすればそれは、語り手のような知人と話をするということにおいてのみだった。それが仕事上の評価とか出世とまるで関係がないのはいうまでもない。そして堀江氏が言うように、その姿勢が「死を直前にしても変わらなかつたというだけの話」である。しかし堀江氏は、このエッセイで明らかに、この老人の、そして講演会場での「老年」の方々の「途切れたままの雰囲気」に、いわば人生の後輩として、一種の憧れを抱いている。

この「途切れたままの雰囲気」は、死後に滲み出てくるわけではない。じつは前からずっとあって、しかも年齢を重ねるにつれてより澄んでくるものなのだ。具体的目的があつての勉強ではない。理屈抜きに知ることが楽しくて、それを糧にしてきた人間だけに許される、終わりのない「通過点」だからこそまというる空気。(同上、六九頁)

しかし、この「雰囲気」は「年齢を重ねるにつれてより澄んでくる」ものだとしても、「理屈抜きに知ることが楽しいのは「老年」だけの特権ではないだろう。この老人は若い頃からずっとそのことを糧にしてきたのだし、「理屈抜きに楽しい」ことは若者にとつても、いやむしろ若者にとつてこそ、知ること、学ぶこと、読むことのきつかけであったはずである。しかし、未来ある若者はたえず目標設定を迫られ、その「楽しさ」がだんだん目標という「理屈」に汚染され、ざらついていく。そのざらつきが取れて澄んでくるのは、ようやく終わりが視野に入ってくる「老年」なのだろう。とはいえ、冒頭の疑問に戻れば、研究者が研究の道を選ぶのも、やはり最初は、学ぶこと、読むこと、理屈抜きの楽しさからではないだろうか。それがだんだん「書いて発表」という短期的なゴールに汚染されてくるのではないだろうか。

しかし、幸いなことに、自分の場合は、学生時代から、

読むために読むこと、いくつもの人生を包み込むようなテクストに入り込み、その襞を拵げようとする、その営みの貴さを折に触れて確認させてくれる場があった。それが読書会だった。院生仲間や先生たちとのいくつもの読書会に参加してきたが、もつとも強く印象に残っているのは、修士課程の頃に通い始めた、酒井健先生主催の「バタイユを読む会」だ。月に一回、四時間ほどかけてジョルジュ・バタイユ『内的体験』の原書を一回に数ページ読むという濃密な会だった。このとき酒井先生のコメントを聞いてぎっしり書き込んだメモを、私はいまも『内的体験』を読むとき参照している。

読むために読む、もつと読むために聴く

修士課程の頃に一緒にジャック・デリダの『滞留』というモーリス・ブランショ論を読んでいたブルースト研究者の坂本浩也さんが、二〇一八年から、勤務先の立教大学で「新訳でブルーストを読破する」という読書会を開催し、毎回会場一杯の愛好家を集めていた。その様子を窺って、坂本さんは理想的な読書会を大規模な形で実現させていると感じた。そこに集っていたのは、ひとりで読んだテキストをさらにもつと読みたいという人々だったからである。この読書会の肝要な点は、対象テキストを「読んでくること」が参加条件だったことだ。これは多くの学会や研究会と違う。大抵の研究会では特定の研究者が研究発表を行い、

発表後に質疑が行われ、もつて発表者の業績となる。しかしそこには、共通のテキストを読んだ上でさらにそれを読む、という営みがない。テキストはひとりの人生を越えるほどの拡がりを持つものだから、ひとりでは読み切れない。皆が読んだ上で別の読みを、さらなる読みを聴くのが読書会の醍醐味である。

十五年ほど前からだろうか、中山眞彦先生が創設され、赤羽研三先生・北山研二先生・佐々木滋子先生・吉田裕先生が引き継いだ、フランス文学を中心とした研究会に参加し、数年前から、渡名喜庸哲さんと共に世話人を引き継いでいる。最初に参加したとき、衝撃を受けた。発表がないのだ。十〜二十人ほどの参加者は、あらかじめ定められた、参加者の一人が執筆した三〜五本の論文をすでに読んでいる。テキストを読んでいることは前提条件だ。四時間ほどの研究会はひたすら、参加者が批評を述べることに費やされる。論文発表はゴールではなく始まりなのだということ。をこのとき痛感した。文学作品だけでなく論文も読まれることで始まる。そして読みは一人一人異なる。この研究会に出席しても、発表者も参加者もいかなる業績も得られない。ただ、読みの営みだけがある。その意味で、この研究会は読書会の延長線上にある。私はそのような営みの貴さを、年長の先生方に教わった。そしていまも教わり続けている。

ストレッツチとしての読書会——「沈黙読会」の試み

斎藤真理子（翻訳家）

読書会には、引き出す力がある。その力がどう作用するかによって、二タイプの読書会があると思う。

まず、人が本から何かを引き出す読書会。

次に、人から本が何かを引き出す読書会。

前者の「人が本から何かを引き出す読書会」は、私も学生ころによくやっていた。学習会や自主ゼミに近いスタイルだ。

私が大学に入ったのは一九七九年で、バブル経済が始まる前ののどかな時代だった。学生運動の時代はとっくに過ぎ去り、サークル活動といえばテニスやスキーの同好会、一方で広告研究会というものが台頭しはじめていた。あれは今でいう「謎の経営者目線」の走りだったんじゃないかと思う。

だが、学内の隅っこには社会問題に頭をつっこみたい人たちのためのサークルがあって、私はそこで学生生活の大

半を送ってしまった。具体的にいえば女性問題（現代なら間違いなく「フェミニズム」というだろう）を勉強するサークルと、朝鮮語を勉強するサークルだ。

その界限ではわりと頻繁に読書会をやっていた。有志が集まり、期日までに一冊の本を読んで話し合う。そこでは「自主運営」という空気が重要な意味を持っているらしかったが、最初のうち、私にはそのニュアンスがよくわからなかった。「じゃあ、自由に話してみて」と言われて、「授業じゃないんだからリラックスしろという意味だな」とは思ったが、先輩たちが想定する適切な読み方ができないんじゃないかと思うと気がひけた。実際、ときどき「それは違う」とか言われもしたし。

恥ずかしかった読書会の思い出

でも、二年生になり、三年生になるうちに、自分でも驚

くほどさっさと「読書会とはこういうもんだ」という流儀になじんでしまい、かつての自分のような新入生が困らないよう、場を盛り上げるべきと考えるようになっていた。

そのころの、恥ずかしかった思い出がある。

四年生のとき、大学のそばの喫茶店で、三人で読書会をやっていた。女性問題を考えるサークルで、一年生二人と私の三人で、そのときの本はもろさわようこの『おんなの歴史』だったと思う。女性史の入門書みたいなものだ。

店内に演劇のポスターがいっぱい貼られ、『ガロ』なんかの少し古いマンガやアート系の雑誌が置いてあるような、ちよっとクセのある、典型的な学生街のお店だった。そんなところで、「母親が変われば社会が変わるとい言葉があるけど、大多数の母親は自分から社会を変えることはできない、だって経済的に自立していないから」みたいなことをぼそぼそ話していたのだから場違いな感じだが、要は、下級生を乗せなくちゃいけないと思って、張り切ってお茶をおごったのだと思う。そして、その場はそれなりに回っ

ていたとも思う。

だが、読書会が終わりかけたときに予想外のことが起きた。近くのテーブルから同級生が立ち上がると、私に向かってにこっと笑いかけ、「頑張ってるネ！」と私に声をかけてから出ていったのだ。仲の良い同級生だったが、後ろにいたなんて全然気づいていなかった。ということは、さつきまで自分がしゃべったことを、あの子は全部聞いていたのか。そう思うといたたまれなかった。

たぶんあの子は、ほんとに「頑張ってるナ」と微笑ましく思ってくれたのだと思う。私は専攻の勉強から落伍しかけた学生で、授業には最低限しか出ていなかったが、クラスの間とは仲が良かった。みんな私のことを「いつも何か変なことをやってる真理子」という感じで放っておいてくれて、でも会えばご飯を食べたり、一緒に旅行に行ったりもする。それでも読書会を見られてぎよっとしたのは、一言でいえば、性急な読書の姿を見られたのが恥ずかしかったんじゃないか。

回顧し
今憲法の
理論構築を問う

芦部憲法学

高橋和之
編
長谷部恭男

生誕一〇〇年記念。芦部信喜の憲法研究の意義と今日に残された課題を憲法学者二九名書き下ろしで挑む決定版！

軌跡と今日的課題



A5判 定価10,560円



岩波書店
東京・千代田・一ツ橋

www.iwanami.co.jp

私たちはそのとき、本から無理やり知識を吸い取って、自分に定着させようとしていた。つまるところ、本を自分サイズに縮めようとしていたのだ。それを、一人ならまだしも、人と一緒にやっていること、そのリーダーみたいなの振る舞いをしていたことが恥ずかしかったのだろう。女性の経済的自立についてただ話してただけなら、そんなに気まづくなかったはずだ。でも「ほら、●ページに○○○○と書いてあるよね、そこを見てほしいんだけど、これは○○○○○という意味じゃないのかな」みたいな言い草をしていたから、照れたのだ。

ここにはいろんなポイントが含まれている。何のために読むかということ。そして、一人で読むことと複数で読むことの違い。でも、恥の記憶というものはえてして早く忘れてしまいたいものだから、それ以上に考えを深める機会はなく、読書会というものは部外者に見られたくないもんだという印象だけが残って終わった。

本の感想にとどまらない思いが流れ出す

これが「何かを引き出す読書会」の思い出だとしたら、「何が引き出される読書会」は、翻訳を仕事にするようになってから体験したものだ。

私が翻訳したある韓国の小説が出版されたとき、「読んで後で無性に他の人と話したくなる本だ」という声をたくさん聞いた。自分でも似たようなことを感じていたので、

読書会向きの本だということを積極的に呼びかけてみようかと思ひ、手始めに、身近な人だけで小さい読書会をやってみた。本に出てくる人物について思ったことをただただしゃべりまくるだけの会、という設定にした。

それ自体はとても楽しかった。けれども同時に、確かに読書会に向く本だが、全く同じ理由ですごく読書会に向いてないのかもしれないと思った。つまり、本によって引き出されたことをどこまで共有していいのかという問題があるのだ。

読書によって引き起こされるさまざまな内面の体験がある。そこに傷があると気づいていなかった傷を思い出し、り、なぜそうだったのかを考えるうちに重要な視点を手に入れたり。それをとりわけ強く促す本というのが、確かにあるのだ。当事者にとっては、それらも含めたものがその本の読書体験ということになるが、知らない人が集まった読書会でどこまで話したらいいのか、その判断が難しい。

このような思いを持つ人がそれなりにいることに気づいて、私は改めて、やっぱり本というものは単なる活字の束ではなく、読書会は本だけで終わらないということに気づいた。というより、本は、本だけで終わらないから本なのだ。

わかりづらいだろうから、文学紹介者の頭木弘樹さんの言葉を借りてみよう。

【WEBみすず】で頭木さんが連載中の「咬んだり刺し

【完訳版】第二次世界大戦 2 彼らの最良のとき

チャーチル ダンケルク脱出、フランス失陥、バトル・オブ・ブリテン、ブリッツの難局を語る。[全6巻] 伏見威蕃訳 ¥6050

デジタルの皇帝たち

プラットフォームが国家を超えるとき
レードンヴィルタ サイバーリ
バタリアンの夢と現実。闇サイト
から仮想通貨まで経済史的に活
写する。濱浦奈緒子訳 ¥4400

ヒトラーとスターリン

独裁者たちの第二次世界大戦
リース かつてない大量死を導
いた政治手法を縦軸に、戦争体
験者の証言を横軸に、大戦の本
質を語る。布施由紀子訳 ¥6050

真理と政治/政治における嘘

アーレント 現代世界における
政治的出来事と事実と嘘のあり
方を考えるために。アーレント
の精髓2篇。引田・山田訳 ¥3080

ジャンヌ・ダルク

預言者・戦士・聖女
クマイヒ 当時の最良の史料
にのみ依拠して「脱神話化」、少
女の生涯と活動と時代の実像に
迫る歴史書。加藤 玄監訳 ¥5720

形象・偶像・仮面

コレージュ・ド・フランス 宗教人類学講義
ヴェルナン なぜ古代ギリシア
の神々は人間の形なのか。宗教
形象とイメージ史の名著。前田
耕作梗概。上村・饗庭訳 ¥6600

自由は脆い

ギンズブルグ 大衆操作は古く
て新しい。文献学はフェイクニ
ュースと関えるか。歴史家の最
新論考集。上村忠男編訳 ¥5940

東京文京本郷 2丁目20-7
みすず書房
tel.3814-0131 fax 3818-6435(税込)
www.msyz.co.jp

たりするカフカの『変身』は、カフカの小説『変身』を
新訳しながら超スローリーディング(ものすこくゆっくり
読む)し、さらに、読みながら思い出したことや考えたこ
とも、脱線を気にせずに、どんどん書いていくという趣旨
だ。その理由が、「読書の半分は、本に書いてあることで
はなく、本を読みながら自分のうちにわきあがってきたこ
とにあると思うからだ」と書かれている。これに異論のあ
る人はあまりいないのではないか。
自分が翻訳した小説の読書会に呼んでもらって同席して
いると、本の感想にとどまらない思いが流れ出す瞬間を目
撃することがたびたびあった。そのときに聞いたコメント
のいくつかは、今も水がしたたるほどに生き生きと記憶し
ている。おそらく、面と向かって「あなたの働き方の問題
は何?」「今の日本で何がいちばんあなたを苦しめてい
る?」などと聞いたって、あんなにみずみずしい答えは返
ってこないだろう。『こびとが打ち上げた小さなボール』(チ
ヨ・セヒ著、拙訳、河出文庫)という本と、読書会という場

書会をやっている。『韓国文学の中心にあるもの』(イース
そして私は昨年から、「沈黙読会」という変わった読
書会をやっている。『沈黙読会』の試み

面があったからこそ、それは口にされ、記憶にとどめられ
たのだと思う。引き出す読書会ではなく引き出される読書
会だからこそその邂逅だった。こういう人たちがいるとい
意識はその後、翻訳をする上で、大きな指標となった。
そこには、読書会という場の意味が自分の若いころとか
なり違ってきているという実感も伴う。ジャッジする人や
チューターがおらず、本を媒介にして集まっているが、と
きには経験の分かち合いの場になりうる。だからこそ、こ
の場合なら大丈夫という安心感が大事になるだろう。それを
保証するのが、読書会の主催者だったり、または本のセレ
クトそのものだったりするかもしれない。最近では、読書
会で話されたことを不用意に他者に話さないよう注意喚起
する読書会も多い。

ト・プレス)という本を作ったときのチームで運営しており、東京・神田神保町のEXPRESSIONというワーキングスペースにもなる空間で月一度、土曜日に行う。午前十時からそれぞれの読みたい本を読み、お昼をはさんで午後四時までまた読んで、その後、参加者全員で話す。イメージとしては「猫の会議」、つかず離れずで何となくお互いを意識している程度の関係だ。カウンタ―、ボックス席、ドアの閉まる作業席など複数のスタイルの席があって、移動してもいい。

普通の読書会は当然、読んだ本について話すが、この会では主に「本を読んでいる間、自分の脳に何が起きたか」について話し合う。それぞれが今日の自分の経験を話すわけだから、仕込みようもないし、何を話しても絶対に優劣が生じない。だって、人によって本当に「読む」ことの中身は違って、今まで聞いたことのない話ばかりなのだから。活字の群れから何らかの内容を脳に取り込む際の手続きにおいて、人間は驚くほど多様である。

一つ大事な約束があつて、それは、「読書の間はスマホを切る」ということだ。実はこれがこの読書会の目玉でもある。そんな個人の心がけでいくらでもできると思うだろうが、実際にやってみると改めて、自分がいかにスマホに頼っていたかに気づいて驚く方がたくさんいる。

私自身がそうだった。スマホへの依存度は平均以下だと思っていたが、いざ実行してみると、ものの十分、二十分

で手が無意識にスマホを探すので驚いた。つまり、意味がわからない言葉を検索したいとか、著者の経歴を確認したいとか、口実はいくらでもあるのだが、要はスマホに逃げる回路が閉じられているのが不安だったらしいのだ。これは単に利便性に頼っているというより、自分の感覚だけで本に向き合う胆力が低下しているのではないかと思われた。というのは、退屈したり何か検索したいときだけでなく、本の内容にぐっと感情が動かされたとき、その感情を持って余して、一呼吸置くためにスマホを探すこともあったからだ。私もそうだが、ここで一度スマホを切った読書を体験してみると、次はぐっとハードルが下がり、日常的にときどき切るのが苦ではなくなったという人も多い。

今まで十回やってきての経験はいずれまとめて何かの形で公にしたいと思っているが、例えば何度も参加してくださる方の中には、「先月は参加できなかつたけど、次の沈黙読会にはどれを読もうかなと考えるのが楽しみだつた」という方がいる。この場合、参加してないときにもその方の中で読書会が稼働していたことになる。

また、この読書会は時間が長いので本を複数冊持つてくる人が多く、三冊、四冊が珍しくない。その際、どれをどう組み合わせるかを考えるのがとても面白いという方が多い。例えば、「これは〈チェイサー本〉です」などとおっしゃる方がいる。チェイサー本とは、「メインに持つてきた本を読み飽きたときのための本」だそう。

(新刊)

移民社会の ナショナリズム

持田洋平著 シンガポール近代華人社会史研究。植民都市の巨視・微視から、清末のアジアと華人という自意識の誕生を描く。3520円

客家と日本

周子秋監修・河合洋尚編 知られざる日本と中華圏の交流史。かつて「東洋のエタヤ人」とも言われ、世界各地に移住した民族集団。990円

日本人類学の血脈

山下晋司著 伝承の現場と論理。民族学、人類学、そして土俗や民俗。百数十年の歩みをさまざまなエピソードを交え語る学史。880円

絵本から学ぶ 韓国の言葉と文化

立川真理恵著 暮らしと心の原風景を尋ねて。もうひとつの韓流の魅力を歴史や背景、厳選12作品、言語学習への活用等で語る。880円

(後評既刊)

記憶と歴史の人類学

風間計博・丹羽典生編 東南アジア・オセアニア島嶼部における戦争・移住・他者接触の経験。史実と虚偽のあいまいに立つ、注目の論集。3960円

中国民族誌学 100年の軌跡と展望

河合洋尚・奈良雅史・韓敏編 中国を対象とした膨大な人類学的研究を総覧。地域社会や国家、民族への多様な眼差しを俯瞰。3960円

風響社

〒114-0014 東京都北区田端 4-14-9
〒 03-3828-9249 (定価は税込)
URL: <http://www.fukyo.co.jp>

実は、こういうことを話しているときの皆さんは非常に楽しそう、ここにこそ、その人の読書生活がよく表れているのではないかと思う。

本と本の間。または、読んでいる時間と読んでいない時間の間。これらの「間」は一人ひとりのオリジナルで、絶対に代替がきかない。この「間」をデザインしようとする行為の一つ一つが、人間の面白さを痛感させてくれる。そうした「間」のストーリーこそ個性だし、大げさにいえば一人の人が生きている証ともいえる。

読書会は一冊の本をめぐる話をする人が多いし、書評も大体は一人が一冊の本について書くことが多い。だから「本と本を結ぶストーリーを分かち合う」という経験はほとんどないと言っている。友達と話している、たまたまそういう話題に行き着くことはあるかもしれないが、沈黙読書のいいところは、それ目当てに集まってきて、そんな話ばかりしていることだ。「今日、自分はこの本とこの本をこういう理由で組み合わせて持ってきた。実際に読

んでみたらこっちは要らなかつた。なぜかという……」。そんな話の中に、その人の生活と今まで生きてきた背景が見える。

引き出す読書会もあるし引き出される読書会もある。両方とも切実で、だからこそ取り扱い注意でもあると思う。そして沈黙読会はそのどちらでもない、あえていえば、何も持ち出さない読書会だ。共有するものが漠然としすぎてはいるが、例えば、集まった人たちで一緒に読書のストレッチをやるような試みと考えている。

今後、本のあり方や書店のあり方、書くことと読むことのあり方は否応なく変わっていくだろう。かつての読書へのノスタルジアではなく、新しい読みを見出していくことが必要になるだろう。夾雑物を取り払い、素手で本と向き合うために、対話の知恵によって道を見出していききたい。そのための方が、この変わった読書会であればいい。いきなり激しい運動をしてけがをしないために。

読書会の中国近現代史

比護 遥

(日本学術振興会特別研究員 P D)

読書は一人で静かにするからこそ気が楽なのだが、ときには人と語り合うのもよいものだ。同じ一冊の本なのに、そんな読み方もあったのかと気づかされる、それが読書会の醍醐味である。

ただ、読書会を続けていくのは、なかなか難しい。日々の仕事に追われると、手を抜いても怒られることのない読書会の準備は、ついつい疎かになる、だんだんと参加者同士のやる気に差が出てきて、自然消滅に至ってしまった苦い経験が何度かある。

現在、細々と参加を続けている読書会は、コロナ禍の副産物とも言うべきオンライン会議システムで行うものだ。地理的な距離を越えて、自宅からすぐに参加できるのは、やはり便利である。

小文では、筆者が近現代中国の読書について研究するなかで見つけた^①、一九四〇年代前後の読書会の事例を紹介し

たい。時と場所は異なれど、やはり似たような収穫を得たり、同じような悩みを抱えたりしていたことがわかる。とはいえ、特異な時代状況ゆえに、読書会に課せられた使命はずっと切実なものであった——そして、それゆえの危うさもあったかもしれない。

抗戦のための読書会

「読書会をどう組織するか」という文章が、一九三九年の『読書月報』の創刊号に掲載されている^②。この雑誌の版元は中国共産党と近い関係にあった生活書店で、戦時首都の重慶で発行された。それゆえここでの「読書会」とは、当然ながらいかに「抗戦」を実現するかという問題意識に根差したものである。とりわけ、「無数の教育機関が敵の飛行機に爆撃されるか、さもなければ敵の大砲に破壊され、何千何万もの青年が学校に行けなくなった」なかで、自ら

の力で学習を進める必要性が増していた。

この文章で推奨される読書会の形式は次のようなものだ。まず、中心的なテーマを決め、それに沿って何をどのよう
なペースで読み進めるかを確定する。それから、毎週一、
二回のペースで、報告者が自分の意見や疑問を発表したの
ち、全体で討論を行う。また、本の内容とは別に、毎回直
近に起きたニュースを振り返ったうえで、国内外の情勢を
議論することも必須とされた。

『読書月報』の誌面では、読書会を実際に開いた体験談
も共有された。十数人の仲間と読書会を始めて約一年にな
るといある学生は、参加者の興味がそれぞれ異なるため
政治組、経済組、文芸組などに分けて、「現段階での日
本の政治経済の見通し」などの共通のテーマを決めて、そ
れぞれの知識を共有しつつ、討論も行う工夫をしたと報告
する。^③

さらに、それぞれの人が分担して自ら読んだ本の内容
を要約して報告する一方、共通の本を読んで問題点や優

れた点を共有することも行われた。そうすることで、「自
らの問題に対する理解と認識を深める」ことができた
という。

もちろん、このように読書会が必ずうまくいくとは限ら
ない。別の投稿者は、「私が集団学習の精神で組織された
読書会に参加して一年が経ちました。この一年間、満足よ
りも失望が多く、成功よりも失敗が多かったといえます。
このような失敗で、多くの会員が抜け出し、責任者はやる
気をなくし、活動が停滞しています」と記した。^③当日に討
論だけすればよいと思つて、十分に準備せずに読書会に参
加する人が多かったことや、もともと持っている知識の水
準にばらつきがあったこと、計画性を欠いていたことなど
を、失敗の原因として分析している。その教訓は、正しい
道を指し示してくれるような、経験のある指導者が必要だ
ったのではないかと感じる。

列島の東西をつないだ(東海)の
あたらしい中世史像



全5巻 完結!

【企画編集委員】山田邦明・水野智之・谷口雄太 各2970円

① 信長・家康と激動の東海

山田邦明編 列島社会の統合を促した東海「激動の40年」。(最終回)
〈既刊4冊〉①中世東海の黎明と鎌倉幕府…生駒孝臣編／②定利一門と動乱の東海…谷口雄太編／③室町幕府と東海の守護…杉山一弥編／④戦国争乱と東海の大名…水野智之編 【内容案内】呈

きょうだいの日本史

『日本歴史』編集委員会編 古代の天皇から昭和のスターまで、歴史上の兄弟姉妹の多様なあり方から時代を見通す。 2200円

学問の家 大槻家の人びと

玄沢から文彦まで 2420円
一関市博物館編 多彩な分野の学問に功績を残した彼らの生涯。

検証 学徒出陣

西山 伸著 なぜ彼らは軍人となり何を残したのか。戦争の長期化と兵役の現実から考える。 1870円
【歴史文化ライブラリー】

水と人の列島史

農耕・都市・信仰 2530円
松本武彦・関沢まゆみ編 豊かな水が育んだ社会と文化。権力・信仰・儀礼を「水」の視点からとらえる。

創刊70年、「歴史百科WEB」始動!

歴史手帳

2025年版 1430円

日記と歴史百科が一冊で便利。読者プレゼントキャンペーンを実施。

吉川弘文館

〒113-0033 東京文京区本郷7-2-8
電話03-3813-9151 / 価格は税込

誌上の読書会とその終焉

二〇世紀前半の中国において、「読書会」の形式は大いに流行した。これには大別して二種類のものがある。一つは、前述のもののように、実際に対面して開かれるものだ。学校や図書館、政治団体など、あるいは個人によって組織され、そこで書籍の読み方が共有されるとともに、さらなる政治・社会運動を展開するための人的ネットワークの基礎をなすことも多かった。先行研究では、当時の中国が西洋から取り入れた最も重要な思想であるマルクス主義もまた、「読書会を通して広められたことが指摘されている^③。

もう一つ、出版社が主導して、離れた場所に住む読者たちを結び付ける「読書会」もある。これは主に一九三〇年代以降、新興の中小出版社が始めたもので、会員向けに書籍購入の割引や作文のコンテストを行うなど、商業的性格が強いものだった。これは「読書会」と名を冠しているものの、本の内容について議論を交わすという読書会のイメージから離れるかもしれない。ただ、出版社の「読書会」は多くの場合、書評や読書指導などを内容とする雑誌の発行とセットになっており、これが実際の議論を代替する役割を果たした。このような「読書雑誌」は、それ自体が独立したジャンルとしてこの時期に広まっており、日中全面戦争の勃発後にその発行は下火になるものの、前述した『読

書月報』もその一つに数えられよう。

対面での読書会と遠隔地を結ぶ読書雑誌が実質的に連続的なものであったことについて、もう一つの事例を紹介しておこう。国民党と共産党の関係が悪化したことにより、『読書月報』は一九四一年に停刊に追い込まれたが、同じ生活書店から一九四六年に、戦前の同名誌を復刊させる形で『読書と出版』が発行された。その最初のページには、「集団の力で本を買い、本を読もう」という文章が掲げられている^④。

読書が好きな人はふつうお金持ちではなく、多くの新しい本を買い置くのは決して簡単なことではありません。(中略) 現在の本が高いという状態をどうにかするために、私は次のようなことを友人たちに提案したいと思います。志を同じくする人で集まり、小規模な読書会を組織して、お金を出し合って共同で本を買うとともに、集団で読書して討論するのです。

これには早速反応があり、次号に「読書会を組織するのは賛成です。ただ昔やった経験からすると、長続きさせるのは非常に困難です。(中略) 読書会を復活させたいのですが、どうすれば長期的なものにできるかわかりません」という投書が掲載された^⑤。これに対して編集者は、「読書会を組織するには、形式にこだわる必要はありません。会

知泉書館

ヨーロッパ思想史入門
歴史を学ばない者に未来はない
金子晴勇 多民族社会をヨーロッパ共同体に形成していくプロセスを、思想史の視点から解明 四六/276p/2300円

スキャンダルの狭間で
カント形而上学への挑戦
『純粹理性批判』とルソーの影響
ジェレマイア・オルバーグ
ルソーがカントに与えた見えない影響を丹念に分析した必読の書 A5/328p/4500円

シェリング自然哲学とは何か
グラント『シェリング以後の自然哲学』によせて
松山壽一 近年関心が高まっているシェリング自然哲学に長年携わってきた著者による提言の書 四六/232p/3200円

ヘーゲル全集 第6巻
イエーナ期体系構想Ⅱ
論理学・形而上学・自然哲学 (1804/05)
座小田豊編「無限性」などのヘーゲル哲学の重要概念を発展的に展開した手稿と、詳細な解説等 菊/824p/10000円

意識と〈我々〉
歴史の中で生成する
ヘーゲル『精神現象学』
飯泉佑介『精神現象学』をヘーゲル哲学体系の中で包括的に解釈。思考の運動と全体像を捉える 菊/444p/6000円

バークリ
記号と精神の哲学
竹中真也 旧説を破壊してバークリの学問的営為を「記号理論」で体系的に捉えなおす意欲作 A5/342p/5200円

東京都文京区本郷 1-13-2 (税別)
TEL03-3814-6161 FAX03-3814-6166
http://www.chisen.co.jp

この提案に対して編集者も、「出版物を使って学習を手助けし、その成果をもとにさらに雑誌を充実させるというのは、もともと本誌の趣旨でもありますが、まだ足りてい

ることを画策していた。」「読書と出版」をその舞台とするものになり「孫」の提案に対して編集者も、「出版物を使って学習を手助けし、その成果をもとにさらに雑誌を充実させるというのは、もともと本誌の趣旨でもありますが、まだ足りてい

の名前がなくなるとも、規約がなくなるとも、どうということはありません。重要なのは、読書をしたいけれど多くの本は買えない個人（同級生、同僚など）が何人かいるということ「です」と気楽に始めることを呼びかけた。

「読書会の組織について、私たちの考えでは読者が自分でやってほしいと思っています」という方針をとっていた。しかし、一九四七年から始まった巻頭連載の「学習の話」で、孫起孟が「学習合作」を提案してから潮目が変わる。「学習合作」とは、先生と生徒という一方的な関係ではない、対等性の下で協力して学習を行うというものだ。孫は「本誌のような小さな雑誌も数十数百の学校に相当するものになり「孫」の提案に対して編集者も、「出版物を使って学習を手助けし、その成果をもとにさらに雑誌を充実させるというのは、もともと本誌の趣旨でもありますが、まだ足りてい

ないということは自覚していました。起孟先生からのご教示は、私たちも非常に嬉しいし、読者のみなさんにとってもきつと嬉しいものだと思います」と応じ、次号から早速開始することを宣言した。

まずは学習の関心などを記した自己紹介を送ってほしいという呼びかけに応じ、次の号に早速、氏名と関心分野など、二三人分の自己紹介が並んだ。相互の文通が可能のように、住所を付記してあるか、編集部が手紙を転送できるようにしている。さらに、自己紹介の内容などをもとに、討論のテーマがいくつか設定され、これについて意見を送るよう呼びかけられた。学習合作を提案した孫は、「こんなに読者の熱烈な反応があるとは思っていなかった」と驚いている。その翌月にはさらに五九人の自己紹介が寄せられ、前月で提起されたテーマに意見が集まるとともに新たな討論のテーマも提起、輪が広がっていった。討論のテーマは、「自学における困難」や「ノート取り方」などの身近な学習における問題から始まって、徐々に「中国の内

戦の性質」など時事問題に関する論題が提起されるようになった。

後年の回想からも、顔も知らない読者同士が実際に熱心に手紙をやり取りして、発禁となっていた本の貸し借りなどもしていたことがわかる^①。ただ、多くの青年に熱烈に受け入れられた「学習合作」は、結局わずか半年で幕を閉じた。その告知ではただ「用紙を節約するため」とされたが、実際のところは、活動的な共産党員の参加者も増え、直接行動への勧誘にも利用されるようになり、国民党の当局に目をつけられて逮捕者も出たことが、打ち切りの原因だったようである^②。

革命過ぎ去りし後

国共内戦は最終的に共産党の勝利に終わり、一九四九年に中華人民共和国が成立した。運動に次ぐ運動を特徴とする毛沢東時代の政治文化は、やがて文化大革命として極致を迎えた。革命の嵐が過ぎ去った一九七九年に、生活書店を前身の一つとする三聯書店から、雑誌『読書』が創刊された。

同誌には、革命運動のさなかでの読書会を回想する記事が、いくつか掲載されている。その基調は、青年時代の美しい思い出として当時を振り返るものだ。例えば著名な経済学者の于光遠は、「そのような読書会で啓蒙の教育を受け、多くの友人と知り合い、長期の革命闘争において戦闘の友

情を培った」と記す^③。

しかし、注目すべき証言もある。作家の陳企霞は、やはり自ら経験した読書会の効用を述べつつ、その後の運動の変質についても次のように言及している^④。

ところで、私が話しているのは読書会のことだが、ここには「会」の字がある。早い段階から、共産党には会が多いという人がいた。「四人組」が党の権力を篡奪していた暗黒の時期「文化大革命のこと」において、「学習班」や「学習会」、さらに「読書班」や「寄宿学習班」の類は、束縛となり、ひいては人民の精神生活を虐げ、人民の自由の権利を剥奪する桎梏となっていた。長らく、いわゆる「学習する」や「会を開く」ということに対して、聞くだけで頭痛を感じるようになってしまった。 (中略) それならば、読書会を開くと提唱することも、時代に合っていないのだろうか？ だからこそ、一つの原則があるべきだ。すなわち、これらの活動において、十分な民主の精神を提唱して発揮しなければならぬ。形式主義に反対して、必ず自発的な参加の原則によるというものだ。無理強いをせず、多くを求めず、来るも去るも自由で、制約を設けないのだ。

読書会の基礎にあるのは自学の精神であるが、いかに抗

戦や革命の遠大な理想を抱えていても、その努力を続けるのは容易ではない。かといって、指導者を求め、計画化と組織化を推し進めようとするとき、自発的な参加は自由への「桎梏」に転じ得る。近現代中国における読書会の歴史は、下からの大衆運動と上からの抑圧が紙一重につながっていた中国革命の軌跡を象徴するものでもあるかもしれない。読書会における「十分な民主の精神」とは何なのか、改めて考えさせられる。

- (1) 比護遥「近現代中国と読書の政治―読書規範の論争史」東京大学出版会、二〇二四年。
- (2) 楠「怎樣組織読書会」『読書月報』第一卷第一期、一九三九年、三三―三四頁。
- (3) 黄流「一年来的集体読書」『読書月報』第二卷第一期、一九三九年、三六―三七頁。
- (4) 峽風「集体読書為什麼会失敗」『読書月報』第一卷第七期、一九三九年、三一〇―三一二頁。
- (5) 常昕・陳偉超「一九一八―一九二七年読書会組織的馬克思主義閱讀傳播實踐」『出版發行研究』二〇二三年第八期、九二―九八頁。
- (6) 程河清・操瑞青「出版、閲読与生意―二〇世紀三〇年代初新書業の読書会実践」『出版發行研究』二〇二二年第一期、九六―一〇三頁。
- (7) 「用集体力量來買書読書」『読書与出版』第一卷第一期、一九四六年、一頁。

- (8) 「怎樣組織読書会？」『読書与出版』第一卷第二期、一九四六年、一六頁。
- (9) 「簡覆読者」『読書与出版』第一卷第四期、一九四六年、二二頁。
- (10) 孫起孟「獻議一個學習合作的計畫」『読書与出版』第二卷第四期、一九四七年、一―三頁。
- (11) 孫起孟「下一步如何？」『読書与出版』第二卷第六期、一九四七年、五一頁。
- (12) 何金銘「美好的回憶和良好的祝願」『読書』一九八二年第九期、一五五―一五六頁。
- (13) 「編者的話」『読書与出版』第二卷第一期、一九四七年、一〇頁、「本刊啓事」『読書与出版』第二卷第一〇期、一九四七年、一二頁、傅豊村・朱子泉「關於『読書与出版』和『學習合作』的回憶」『読書』二〇〇四年第五期、八一―八五頁。
- (14) 于光遠「懷念『読書会』組織」『読書』一九七九年第七期、二―三頁。
- (15) 陳企霞「也說說読書会」『読書』一九八〇年第七期、三四―三五頁。傍点は原文ママ。

* 本稿はJSPS科研費(23K0323)の成果の一部である。

「師範」のいない読書会——その可能性と未来

三津田治夫（読書会ファシリテーター）

どんな読書会か？

私たちは開催場所から、本会を「飯田橋読書会」と命名している。

人とのつながりを通して未知の本と深くかわろう、本の新しい可能性を探ろうと、編集者とITエンジニアを中心に二〇一四年に本会を立ち上げ、現在は十二名で運営が行われている。

十一年目に突入した私たちの読書会を動かしてきた要素のいちばんは、中心やトップを置かないという活動形態にある。形としては発起人のKNさんが中心となっているが、他人の指示で動かない・発言しない、マウントを取らない、認知バイアスを仕掛けないという、個人の内発性に重点を置いた活動形態だ。

本の読み方があるべき論で語ったり、知識の深浅を指摘

したりもいっさいしない。あくまでも、本をいかに自由に感じるか、感じたことをいかに自分の言葉で言語化するかを大切にしている。

こうしたことがいわば、ゆるいルールになっている。この会の立ち上げ当初は、「うんちく禁止」「評論禁止」をたびたび口にしていた。うんちくや評論の場はネットなど別にある。一見ゆるく、ある意味厳しいルールを設けながらここまで続けてこられたのも、個人としての本への自由な接触を求めた人たちの化学反応が続いたからだと思っ

る。選書から意見交換まで、意外な言葉が出現する。会の終盤には思いもよらない印象や結論が出る。そうしたことが毎回起こる。だから、読書会は面白い。

以下、私たちがこの十年で得た出来事や選書、印象深い本のこと、メンバーのこと、読書会の未来などを述べてい

きたい。

オンライン開催から合宿まで——印象深い出来事

印象深い会はいくつもあった。

まず、二〇二〇～二〇二一年にかけて六回、ZOOMによるオンライン開催に切り替えたこと。オンラインで読書会ができるものかと半信半疑だったが、意外にも盛り上がりがあった。そろそろいいだろうとオフラインを解禁した矢先、会のメンバーがコロナに罹患してしまったことは最大の危機だった。

コロナ直前の軽井沢合宿は思い出深い。

車三台で分乗し、HNさんが所有する立派な別荘にお邪魔し、読書会の後は周囲観光や散策、浅間山を眺望するホテルで温泉に入ったたり、夕食は近所でイタリア料理を食べ、別荘に戻ってピンクフロイドを聴きながらワインやビールを飲んだりといった二日間だった。読書会という名目でオフライン活動のフルコースをメンバーと共有できたのは実

に豊かな時間だった。ちなみにこのときの課題図書は、ダニエル・カーネマンの『ファスト&スロー(上・下)』だった。

文学から歴史・哲学までの異種格闘技——こんな本を読んできた

二〇一四年からの選書を五六冊、以下に列挙する。

二〇一四年開催 第1回『トランスクリティーク』(柄谷行人著) / 第2回『意識と本質』(井筒俊彦著) / 第3回『娑羅』(山田風太郎著)・『異形の王権』(網野義彦著) / 第4回『台湾海峡』(龍應台著)・『香港・濁水溪』(邱永漢著) / 第5回『五重塔』(幸田露伴著)・『木に学べ』(西岡常一著) / 二〇一五年開催 第6回『モモ』(ミヒャエル・エンデ著)・『綿の国星』(大島弓子作) / 第7回『言葉の海へ』(高田宏著) / 第8回『人類の星の時間』(シユテファン・ツヴァイク著) / 第9回『忘れられた日本人』(宮本常一著) / 二〇一六年開催 第10回『大衆の反逆』(オルテガ・イ・

東京外国語大学ワールドランゲージセンター編

世界28言語図鑑

多言語を
学ぶための
ガイドブック

ここがわかれば世界が変わる。世界の言語の魅力に触れるデジタルブック。 ●288頁・2640円

未来につなげる ESD

持続可能な社会を
里山から考える

倉田薫子[編]
横浜国立大学里山ESD
研究拠点[著]

里山で楽しくESDを
実践! パラエティに富んだ
授業のアイデア集。

●136頁・2750円

大修館書店

〒113-8541 東京都文京区湯島2-1-1

☎03-3868-2651 (営業部)

<https://www.taisakukan.co.jp/>

●定価は税込

ガゼット著) / 第11回『方丈記私記』(堀田善衛著) / 第12回『方法序説』(デカルト著) / 第13回『墮落論』(坂口安吾著) / 第14回『イスラーム文化』(井筒俊彦著)・『イスラーム国の衝撃』(池内惠著)

二〇一七年開催 第15回『銃・病原菌・鉄』(ジャレド・ダイアモンド著) / 第16回『ヴェニス人の資本論』(岩井克人著) / 第17回『山月記』『名人伝』『悟浄出世』『文字禍』(中島敦著) / 第18回『隷属なき道』(ルトガー・ブルグマン著) / 第19回『パイドロス』(ソクラテス作)

二〇一八年開催 第20回『サド侯爵夫人』(三島由紀夫著) / 第21回『現代議会主義の精神的状況』(カール・シュミット著) / 第22回『見えない都市』(イタロ・カルヴィーノ著) / 第23回『最後の親鸞』(吉本隆明著)・『歎異抄』(親鸞著) / 第24回『かもめ』(チェーホフ著)

二〇一九年開催 第25回『海上の道』(柳田國男著) / 第26回『山椒魚戦争』(カレル・チャペック著) / 第27回『フアスト&スロー(上・下)』(ダニエル・カーネマン著) / 第28回『べてん師列伝』(種村季弘著) / 第29回『本居宣長』(小林秀雄著)

二〇二〇年開催 第30回『ガリレイの生涯』(ベルトルト・ブレヒト著) / 第31回『人間・この劇的なるもの』(福田恆存著) / 第32回『生物はウイルスが進化させた』(武村政春著)

二〇二一年開催 第33回『ヴェニスに死す』(トーマス・

マン著) / 第34回『孔子伝』(白川静著) / 第35回『現代経済学の直観的方法』(長沼伸一郎著) / 第36回『ギリシヤ悲劇全集II』(ソポクレス著)

二〇二二年開催 第37回『テヘランでロリータを読む』(アーザル・ナフイーシー著) / 第38回『新しい世界の資源地図』(ダニエル・ヤーギン著) / 第39回『巨匠とマルガリータ』(ミハイル・ブルガーコフ著) / 第40回『近代日本の陽明学』(小島毅著)

二〇二三年開催 第41回『舞姫・安部一族』(森嶋外著) / 第42回『世界史の誕生』(岡田英弘著) / 第43回『昨日の世界(I・II)』(シュテファン・ツヴァイク著) / 第44回『百年の孤独』(ガルシア・マルケス著) / 第45回『アラブが見た十字軍』(アミン・マアルーフ著)

二〇二四年開催 第46回『少年が来る』(ハン・ガン著) / 第47回『空気の研究』(山本七平著) / 第48回『覚書幕末の水戸藩』(山川菊栄著)
ごらんとおり、選書にはほとんど脈略がない。これには参加者たちの発言やマインド、立場を固定化させずに、会の活性化を図るという意図が込められている。

印象深かった四冊の本——評論、文学、歴史から

上記のなかでも、とくに印象深かった本をあげてみる。
『トランスクリティーク』(柄谷行人著)「この作品を読破したい」が、読書会を立ち上げたきっかけだった。作家が

書いたカントとマルクスへのラブレターともいうべき作品。当時の読書会記録がほぼないところが悔やまれる。これを機に再読してみたい。

『本居宣長』（小林秀雄著）「私と『本居宣長』」をテーマに語りあった。知識至上主義に対する小林秀雄と本居宣長の本質的なあり方に疑問を投げかける発言が印象的だった。「ある程度の知識量がないとどういふ話かがわからないし、知識はやはり大事にしなければいけないだろう」「しかしこの本では、そうではない」という点が疑問。「知識がなくて読めないものに関し、最後の最後に知識を捨てると言っているようなもの」という意見が出た。これに対し、「この本では、知識がなくてもよいとは言っていない」「小林も本居も圧倒的な知識を持っている。そういう人が言っていることに逆説がある」という冷静な反論があがったことが興味深かった。

『巨匠とマルガリータ』（ブルガーコフ著）「マタイの福音書をベースにした挿話は面白い」「聖書を理解していたらさらに面白そう」といった読書人としてのまじめな意見から、「面白かったが感動はナシ」「ストーリーとして拡がりがない」「解釈のしようがない」といった辛口な意見も対して、「マンガ的に、純粹におもしろかった」「これはまさに幻想文学」「展開にスピード感があった」「ブラックスユームアと劇中劇が面白かった」という率直な発言が多くあがった。

『寛書 幕末の水戸藩』（山川菊栄著）尊王攘夷運動の引き金になった水戸の天津浜事件に関連し『白鯨』のハーマン・メルヴィルが捕鯨船で日本近海に来ていたことや、山田風太郎の『魔軍の通過 天狗党叙事詩』には本作が相当の情報を提供しているはず、という議論が興味深かった。生き生きとした幕末像が水戸を通して鮮明に見えてきた。

上記四冊にとどまらず、議論が紛糾寸前になった本（現代議会主義の精神的状況（カール・シュミット著）や、肩透かしにあった本など、めぐり逢った本たちの印象を数え上げたらきりがなし。

なお、読書会の記録はWEBサイト「本とITを研究する」(<https://tech-dialog.hatenablog.com/>)に掲載されている。興味のある方はこちらを参照していただけたら嬉しい。

会を支える十二人のメンバーたち

どんな人たちがこの読書会を支えているのだろうか。

メンバーは現役や元現役の編集者、文筆家、組織人、経営者といった、个性的で魅力的な面々で構成されている。誘蛾灯に集まる虫たちのごとく、よくもまあここまで集まったものだと改めて感心している。

以下、メンバーたちを簡単に紹介させていただく。

本会発起人のKNさんは版元の元編集長で、私とともに第二の発起人のKMさんは霞が関で基幹システムを構築するITエンジニア。HNさんは元大手広告代理店の責任者

で、H HさんとS Mさんは理工系版元の、K Aさんは人文系版元の編集者。K Sさんは理工系版元の経営者兼編集者で、S KさんはIT書籍のベストセラー作家。S Mさんはマーケティング会社を経営し、Y Kさんは大手商社勤務。K Hさんは読書会を生業とする方で、最後に私は、システムエンジニアとIT編集者を経て、出版プロデューサー会社で経営と企画・制作に携わる。

この十年から見た、読書会の未来

なぜここまで読書会が続いたのかメンバーと話し合ってみた。飲み会が楽しい、本との出会いや発見が新鮮など、漠然とした理由はあるが明確な答えは得られていない。この点を私なりに解釈すると、自由を求める人たちによる、職業や組織の枠組みを超えた集まりであったところが大きい。

社会のオンライン化は日々加速し、半面、身体性は低下している。スピード感やタイムパフォーマンスという名目のもと、行動や意思決定には絶えず速度が求められる。しかしながら人間は身体と実存の生き物である。百メートル三秒で自走することはできないし、寿命は頑張っても百年、一日の持ち時間は二四時間しかない。成人の肉体が形成されるまでには二十年近くの年月を要する。

本というボディを持った物体に刷られた文字を自力で読み、インプットされたものを脳内で自問自答し声帯で言語化、全身で対話するという作業の価値は、読書会でしか得

られない。自由とは自発的に自分の意志で考え行動することであり、自由を手にするには他者との連帯と共感が必要である。これは、生成文法の生みの親、言語学者のノーム・チョムスキーが二〇一四年の来日時に上智大学の講演で語りかけた言葉だ。読書会という小さな集まりにおいても、こうした自発的な自由と連帯という構造のなかで空間が成立していることは実感する。

言葉と身体性という二つのせめぎあいには、おそらくこれからもまったく変わらない。同時に、言葉と人の流通はますます激しくなる。社会の変化はさらに加速し、人々は言葉と身体性との乖離に違和感を感じる。そして人々はさらに本を求める。

言葉と人の流通には従来のような巨大な組織や仕組みはもはや必要ない。私たちの読書会のような人間系の小さな組織から、生成AIやDAO (Decentralized Autonomous Organization :分散型自律組織) などITシステムを組み合わせた分散協調型の自律的組織まで、組織はより小さくなり、分散し、多様化する。そして限りなく組織の存在感は弱くなり、国家の境界は薄くなる。

進化和停滞を繰り返しながら、これからも私たちは人間の定義を塗り替えていくことであろう。そしてそれを実現するものは、いつの時代にも言葉である。言葉を万人に届ける実体は、これからも「本」である。そしてこれからも本は人と人をつなぎ、連帯のきっかけを生み出すのだ。

大学出版部ニュース

表示価格は税込です

大学出版部協会・活動報告

七月一日(木)

第四〇回日韓国大学出版部セミナー
第一部 日韓発表(「学術出版の流通と販売―現状と課題」土橋由明/崔相根・金恵智)

第二部 グループディスカッション

七月二日(金)

夏季研修会(ケーススタディ…北海道大学出版会)

八月二日(金)

関西セミナー(テーマ『電子書籍』)

七月一九日(金) 一四時〇〇分

第三回 営業部会 開催※

七月二六日(金) 一五時三〇分

第三回 理事会 開催※

九月一三日(金) 一四時〇〇分

第四回 営業部会 開催※

九月一九日(木) 一四時〇〇分

第三回 編集部会 開催※

九月二七日(金) 一五時三〇分

第四回 理事会 開催※

(※理事会・部会はZOOMでの開催)

北海道大学出版会

▼宮部金吾・工藤祐舜著/須崎忠助画『新版 北海道主要樹木図譜』(B5判・一九六頁・六六〇〇円) 大正二年から昭和六年まで製作に一九年の歳月をかけた日本における樹木図譜最高峰の新版。一九八六年刊行の『普及版』(品切)の画は石版刷りをもとにしたが、本書『新版』の画は大部分に原画を用いた。

▼相庭達也著『明治期北海道の兵士たち―徴兵・戦没・慰霊』(A5判・二八〇頁・七七〇〇円) 明治期北海道の人々はどうのように徴兵され戦没し慰霊されたのか。屯田兵と第七師団を中心に、「移民社会」北海道での郷土部隊の成立過程とその東アジア史における役割を多様な史料から解明する。

▼川口雄一著『南原繁「戦争」経験の政治学』(A5判・三五八頁・八八〇〇円) 戦後日本の精神的ファウンダー南原―著作集未収録の作品を博搜しつつ、著作の異版との比較を通して、さらに蠟山政道、難波田春夫、和辻哲郎、田邊元らとの対比によって、その学問・思想の内実を明らかにする。

弘前大学出版会

▼弘前大学人文学部附属亀ヶ岡文化研究センター編『成田彦栄氏考古・アイヌ民族資料図録』(A4判・一五〇頁・定価三〇八〇円) 長い間「幻のコレクション」として、一部の関係者だけが目にしてきた青森市の医師成田彦栄氏の収集品について実測図や拓本、展開写真を豊富に掲載。普段ガラスケース越しには知ることのできない、土器や土偶の作り方や細部の特徴が手に取るように分かる内容となっている。考古学に興味のある方は勿論、原始美術や工芸に関心のある方にも薦めたい。



▼小瑶史朗・篠塚明彦編著『教科書と一緒に読む 津軽の歴史』(A5判・一六八頁・一八七〇円) 足下に広がる歴史からもう一つの日本の姿が浮かび上がる。地方の歴史と既存の歴史教科書を有機的に関連づけ、学校の歴史授業に活用できる素材や視点を提案する試み。

東北大学出版会

▼東北大学文学部編『人文社会科学の未来へ―東北大学文学部の実践』(A5判・四〇八頁・三三〇〇円) 文学、歴史、哲学、社会学、心理学、宗教学……。東北大学文学部で学べる二六の学問分野について、担当教官自らがその奥深さや魅力を紹介する。人文社会科学の未来を担う人への一冊。

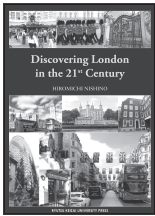
▼佐藤修彰・桐島陽・渡邊雅之・佐々木隆之・上原章寛・武田志乃・北辻章浩・音部治幹・小林大志著『トリウム、プルトリウムおよびMAの化学』(A5判・二六八頁・三三〇〇円) 核燃料物質であるトリウム(第一部)やプルトリウム(第二部)の化学についての入門書。固体化学や溶液化学といった基礎から、実験方法、評価方法、燃料サイクルなど応用について詳細に述べる。さらに、第3部としてMA(NP, Am, Cm, Pa)についての固体化学や溶液化学を丁寧に解説する。既刊の『ウランの化学(Ⅰ)基礎と応用』および『ウランの化学(Ⅱ)方法と実践』と合わせて、核燃料化学の基礎、原子力の応用、環境との関わりについて学べる最適の書。

流通経済大学出版会

▼植村秀樹著『平和国家の戦争論―今こそクラウゼヴィッツ「戦争論」を読む』(A5判・二六〇頁・四四〇〇円) 戦後日本の平和主義を支えていたものは何か。本書は、日本がこれからも平和国家であり続けるための戦争論のすすめである。



▼西野博道著『Discovering London in the 21st Century』(A5判・一六八頁・一九八〇円) 本書は、英国ロンドンの人気観光スポット30か所を取り上げ、その歴史の変遷、見どころ、最新情報をエッセイ風に解説、あるいは学術的、哲学的な考察を試み、英国文化の本質に迫ることを意図して執筆した英文書籍。



聖徳大学出版会

▼塩美佐枝・古川寿子・河合優子・重安智子・関口明子・井口厚子著『教職実践演習―幼稚園教諭・保育士・保育教諭を目指すために』(B5判・一七七頁・一七六〇円) 今まで幼児教育に携わるために学んできたものが教諭・保育士・保育教諭の到達目標に照らして身につけたかを確認できるように、いじめ・食育・特別支援・幼保小連携等幅広く載せ、自らの課題を自覚し、不足している知識・技能を補い定着できるようにまとめた一冊。

▼聖徳大学特別支援教育研究室編『一人ひとりのニーズに応える保育と教育―みんなで進める特別支援「改訂3版」』(A5判・二六七頁・一七六〇円) 初学者のための特別支援教育本。コンパクトなハンドサイズに、全障害について、子どもへの理解と指導・支援に必要な基礎的知識を盛り込んだ一冊。

▼聖徳大学児童学部児童学科編『新しい児童学への招待』(B5判・一〇三頁・一三五九円) 幼児教育・保育・文化・心理の教授陣四〇名が協働制作した入門書。薄手の冊子に児童学の様々な素材が凝縮され学びやすい。

慶應義塾大学出版会

▼西山隆行・前嶋和弘・渡辺将人著『混迷のアメリカを読みとく10の論点』（四六判・二五六頁・二二〇〇円）政治不信、文化戦争、中間層の喪失、二大政党間／内部の分断……複雑さを増す大国が抱える問題を歴史的背景とともにあぶり出す。

▼ラグラム・ラジャン著／北村礼子訳『苦悶する中央銀行―金融政策の意図せざる結果』（四六判・一七六頁・二二〇〇円）世界金融危機を予言した著者が、非伝統的金融政策の悪影響を詳細に分析する。日銀、FRBの今後の行動を予測する上で必読の書。

▼藤井典子著『徳川期の銭貨流通』（A5判・三二五頁・五五〇〇円）江戸時代に生きた庶民はどんな小銭をどう使って暮らしたのか？ 享保・田沼期から明治初期までの人々の生活を、関東圏の史料を発掘して新視点から解説する意欲作！

▼崔誠姫著『女性たちの韓国近現代史―開国から「キム・ジョン」まで』（四六判・二二四頁・二八六〇円）開国、植民地期、分断、戦争、民主化運動、通貨危機、激動の世紀に女性たちはどのように生きたのか、「彼女たち」の歴史／物語を描く。

専修大学出版局

▼佐藤典子著『コミュニケーションの困難―生きづらさを考える14考察』（A5判・二四八頁・二八六〇円）本書では、コミュニケーションを人と人との間の社会的相互作用ととらえ、それがどのような行われているのか、重要と思われるコミュニケーションがなぜ難しいとされるのか、について考察する。

▼根間弘海著『大相撲の方向性と行司番付再訪』（A5判・三〇八頁・三三〇〇円）江戸時代から昭和初期までの大相撲における行司についての研究書。大相撲の儀式や所作における方向性、明治元年から大正末期までの行司番付、四本柱の四色と吉田司家の関係など、行司の自伝や当時の錦絵・新聞・雑誌をはじめとする膨大な資料を駆使した論考九編を収録。

▼藤本一美著『戦後政治と「首相演説」2―一九六五―一九八四』（A5判・二八六頁・三七四〇円）戦後の首相たちはいかなる形で日本の現状と将来の姿を国会議員や国民に披露してきたのか。第二巻は、佐藤、田中、三木、福田、鈴木、中曽根首相の演説とマスコミ報道を通して戦後政治の一端を探る。

玉川大学出版部

▼ブライアン・サイモン著／宮田伊知郎訳『ハムレット工場火災―「チープ化」が生んだ現代アメリカの悲劇』（A5判・三六〇頁・三九六〇円）一九九一年米国南部ノースカロライナ州の町ハムレットで鶏肉加工工場の火災が発生、従業員二十五名が犠牲となった。なぜ火災が起き、被害は拡大したのか。「チープ化（安価）」を追求する新自由主義経済が追い込んでいく現代社会の負の連鎖を様々な史料を駆使して描き出すノンフィクション。



ハムレット工場火災
現代アメリカの悲劇

▼山田満著『国際協力入門―平和な世界のつくりかた』（A5判・二四〇頁・二八六〇円）ウクライナやガザだけでなく、世界には、戦争や紛争、貧困、環境破壊など多くの問題が山積している。本書では、これらの問題を解決し、平和な世界をつくるためには何が必要かを考えていく。自分一人では解決できない問題を仲間との協働によって解決するためのヒントが散りばめられている一冊。

中央大学出版部

▼鈴木博人著『親子福祉法の比較法的研究II』（A5判・一四八頁・一八七〇円）
実親が一時的に養育できない子は、できれば個人の里親家庭で養育した方がいいといわれる。だが、里親は固有の養育権をもっていない。現に子を養育している里親の私法上の地位について、ドイツ法を参考にした端緒的研究書。

▼小林謙一編著『考古資料と歴史史料』（A5判・三三二頁・三九六〇円）
歴史学、考古学による物質文化研究と資料研究、さらには民俗学や自然科学分析にも目配せをした考古学・文献史学の学際研究による歴史復元の途を探るとともに、両者の研究法の違いを取り上げ、研究の将来を見通す意欲的書。

▼橋本能著『ロトルー作品集』（A5判・七二四頁・六三八〇円）
ロトルーは、フランス十七世紀のパロック演劇を代表する作家の一人である。パロックは、十七世紀演劇を総体として捉える上で古典主義とともに欠かすことはできない演劇である。本書は、この作家の作品五編を訳出した。

東京大学出版会

▼川添愛著『言語学バーリ・トゥード Round2 言語版SASUKEに挑む』（四六判・二四〇頁・一八七〇円）
猪木の名言から「接頭辞BLUE」まで、縦横無尽に飛び回り言語学的话题を拾い出す。抱腹絶倒の言語学的総合格闘技。

▼寺田新著『スポーツ栄養学「第2版」—科学の基礎から「なぜ？」にこたえる』（A5判・四五六頁・三七四〇円）
好評を博したヒット作を、最新の知見を盛り込み大幅改訂。減量やダイエット、腸内細菌と運動の関係などを新たに追加。

▼木村草太著『憲法』（A5判・四〇〇頁・二七五〇円）
各種メディアに登場する稀代の憲法学者が、立憲主義の歴史にはじまり憲法のしくみを独自の視点で明解に解説する。判例や重要論点を網羅した、新たな時代のスタンダードテキスト。

▼東京大学法学部「現代と政治」委員会編『東大政治学』（四六判・二八〇頁・一八〇〇円）
東大一年生たちの好奇心に込めながら、法学部の政治学系スタッフがそれぞれの研究テーマについて熱く語った珠玉の講義。東大で政治を学び、東大から政治を考えよう。

東京電機大学出版局

▼リサ・ウエルチマン著／篠原稔和監訳『デザインマネジメントシリーズ カオス・マネジメント—デザインによるデジタルガバナンスの理論と実践』（B5変判・二二二頁・四〇七〇円）
デザインマネジメントシリーズ待望の第5巻。デジタル分野はもろろん、行政機関や教育機関におけるDX化について最新の知見と課題の洗い出し・解決策を提示。デジタル領域を取り入れた組織によるカオス化した状態をいかに管理するか、またデザインの力を用いてガバナンス（統治）することの理論と実践について解説。『デジタルガバナンス』分野の先駆者の原著翻訳版。

▼足立修一著『続 制御工学のこころ—モデルベース制御編』（A5判・二四〇頁・三六三〇円）
制御理論について、なぜそのような理論が誕生したのか、その理論が意味するところは何か、つまり「そのこころは？」について、初学者向けに分かりやすく解説。さまざまな制御理論に関して、相互の関係を示しながら重要なポイントを解説。現代制御を中心としたモデルベース制御がテーマ。

法政大学出版局

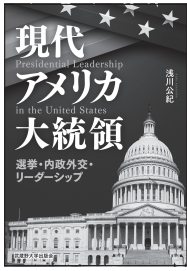
- ▼Th・ヘルツル著／村山雅人訳『古くて新しい国―ユダヤ人国家の物語』(四六判・四一四頁・四四〇〇円) シオニズムの宣言書『ユダヤ人国家』での構想をより克明に描き出し、一九〇二年に発表後、反響を呼んだ近未来小説の初邦訳。
- ▼H・ベルクソン著／松井久訳『ベルクソン書簡集Ⅱ―1914-1924』(四六判・五七六頁・六〇五〇円) 第一次大戦期の米国旅行講演メモや日誌、国際連盟での公的活動など、政治的知識人としての動向を明らかにする貴重なドキュメント。
- ▼J・L・メランション著／松葉祥一監訳『共同の未来―〈民衆連合〉のためのプログラム』(四六判・二三〇頁・三〇八〇円) 環境破壊、新自由主義の不平等、軍事主義には「服従しない」。極右を阻止した著者の大統領選のマニフェスト。
- ▼L・アハメド著／林正雄・岡真理ほか訳『イスラームにおける女性とジェンダー―増補版―近代論争の歴史的根源』(四六判・四四〇頁・五一七〇円) 一九九二年に出版後、世界のフェミニズムに大きな衝撃を与えた旧版に、その後の三〇年間の研究動向と解説を付した増補版。

武蔵野大学出版会

▼池田眞朗編著『日本はなぜいつまでも女性活躍後進国なのか』(A5判・二四四頁・三三〇〇円) 武蔵野大学法学研究所主催のシンポジウムの内容を収録し、わが国の積年・喫緊の課題である女性活躍の遅れの問題を解説している。



▼浅川公紀著『現代アメリカ大統領』(A5判・三〇四頁・三三〇〇円) 大統領選挙の仕組みから今後の課題まで、現代の大統領に関する広汎な事項を扱う。大統領の動きを追うことで、過去を振り返り未来を見据える手掛かりとなる。



武蔵野美術大学出版局

▼三澤一実編『造形実験―新しい美術の授業を始めよう!』(A5判・一九四頁・二五三〇円) いわゆる「お手本」を提示して、生徒に「上手に」作らせる、かつての授業形式から大きく羽ばたくには、教師が生徒を信じ、教師自身が変わらなければ、何も変革は起きない。

授業「造形実験」では、「緊張感を考える」「愛について考える」など、中学生がテーマを決め、用具・用材をみずから選んで表現し、その過程を発表してクラスメイトと共有する。共感を得たり、違和感を覚えたりしながら、生徒がそれぞれ「解」を蓄えてゆく。それが造形実験の目指すところだ。

東良雅人による学習指導要領「共通事項」と造形実験の関わりをはじめ、小山美香子、小西悟士、田中真二郎、大黒洋平、南弥緒、高安弘大、鈴木彩子による三年間の実践報告、編者三澤が四半世紀をかけて臨床から生み出したこのメソッドについて書き下ろす。

VUCA時代の美術教育、今こそ授業が変わる時だ。「先生、これでいいですか?」の声を教室から追い出そう。

早稲田大学出版部

▼村松聡・宮田裕光・小村優太編著『心身論の挑戦―最先端の学際的アプローチから』（早稲田新書・四一八頁・一四三〇円）心と身体は異なるものなのか、あるいはどのようにつながっているのか。心理学、哲学、仏教研究、東洋思想、文化史、文化人類学、教育学と、異分野の研究者たちがそれぞれの視点から心と身体とのつながりを問い直す。人間観が深まる、心身論の最新線。

▼渡邊義浩訳『後漢書 列伝「一」』（早稲田文庫・五六四頁・一四三〇円）大好評「後漢書」シリーズ第五巻。臣下の伝記を収めた「列伝」の一巻目として、後漢初期の英傑三五人の伝記を収録。

▼酒井智宏著『Semantic Externalism and Cognitive Linguistics』（A5判・三九六頁・七七〇〇円）分析哲学では外在主義が定説とされる一方、チョムスキー以降の言語学では内在主義が当然視されている。しかし、哲学者と言語学者が互いの研究に言及することはほとんどない。外在主義の想定と認知言語学の想定との両立可能性を仔細に検討し、哲学と言語学の架橋を図る。※全編英語

関東学院大学出版会

▼小林照夫・澤喜司郎・帆苅猛編『港都横浜の文化論』（A5判・二四八頁・二六四〇円）本書は、開港に始まる港都横浜の歴史を縦軸として、日本の西洋文化の受信基地横浜をステージに、日本の近代化について言及している。横浜が「港の都市（まち）」であり、宣教師が活躍した「文化の都市（まち）」であることから、そうした側面を浮き彫りにしたユニークな書である。（目次）序章 横浜の一九〇年／第一章 横浜開港とハイカラ文化／第二章 幕末の幕府外交／第三章 商館貿易と運上所内英学所／第四章 横浜文化の助っ人／第五章 東アジアの文化センター横浜中華街／第六章 山手に開花した洋楽の世界／第七章 山手の地はミッション・スクール生誕の地／第八章 奉仕に生きた人ベンネット／第九章 横浜におけるキリスト教を基盤とした草創期の障害児教育／第十章 横浜で展開した関東学院のセツルメント活動／第十一章 大学で開花したYMC A運動／第十二章 タイで実践している関東学院小学生たちの奉仕活動／終章 レンズを通して見た港都横浜の今と昔

名古屋大学出版会

▼平井健介著『日本統治下の台湾―開発・植民地主義・主体性』（四六判・三八六頁・三九六〇円）半世紀に及ぶ統治のなかで、台湾は何を経験したのか。信頼できる通史の決定版。

▼B・ファン・バヴェル著／友部謙一他訳『市場経済の世界史―見えざる手をこえて』（A5判・三八〇頁・五九四〇円）ユーラシアにおける複数の市場経済の展開を、超長期的スケールと統一的視座で大胆に把握。成長と衰退のメカニズムを内側から解明し、通説を書き換える。

▼R・パーカー著／栗原麻子監訳『古代ギリシアの宗教』（A5判・四四八頁・六九三〇円）ギリシア文明の根幹をなす神々や英雄への信仰を、一神教的な宗教観を超えて描く。最新の知見に基づいた第一人者による格好の案内。

▼河西棟馬著『後進国―日本の研究開発―電気通信工学・技師・ナショナルイズム』（A5判・三八六頁・六三八〇円）グローバルな技術秩序の転換を求めて――。「先進国」の模倣を脱した戦前技術者たちの系譜と達成を、その背景や挫折した構想ともども明らかにする力作。

名古屋外国語大学出版会

▼呂雷肇著／中井政喜訳『茅盾回想録―私の歩んできた道』(A5判・上巻五八八頁・下巻六〇六頁・共に四九五〇円)
魯迅とともに近代文学を牽引した、近代中国の大家・茅盾の自伝。混迷の時代と戦い続けながら数々の優れた小説、評論、エッセイを遺し、翻訳、編集などに邁進した茅盾。卓越した文人の詳細な記録でもある第一級資料が、初めて日本語に訳された。貴重な写真、家系図、詳細な訳者注、解説、年表、地図なども収録。
▼根無一信著『罪びととワインを酌み交わしたイエス―もう、聖書に「つまずかない」』(A5判・三〇八ページ・二七五〇円)
イエスは実は大酒飲みだった！聖書を「聖なる書」としてではなく、イエスを「聖人」と見なすのではなく、人間イエスの物語として読んでみると、聖書はもつと面白い。気鋭の哲学者による、今を生きる人たちのための聖書再説。



京都大学学術出版会

▼ヴィア・ゴードン・チャイルド著／近藤義郎・下垣仁志訳『ヨーロッパ文明の黎明』(A5判・六三八頁・六二七〇円)
現在も世界中で読まれ続ける二〇世紀最高峰の考古学者チャイルド。ヨーロッパ人類史を解明し、ポップカルチャーの考古学者像にも多大な影響を与えた傑物の若き日の代表作、本邦初訳。詳細な用語説明・解説を付す。

▼猪原敬介著『読書効果の科学―読書の「穏やかな」力を活かす3原則』(A5判・二七六頁・三三〇〇円)
情報社会の現代、本の存在意義は何か？言語力・人格・心身の健康・学力・仕事について、読書がもたらす効果を徹底検証。本を読む人、読まれる人、読ませなければならぬ人、すべてに送る処方箋。

▼東川玲著『情報空間と法―表現の自由の衝突とプライバシーの新たな諸相』(A5判・四二八頁・五五〇〇円)
スマホの向こうで「表現の自由」が激しく衝突を始めた。その責任を負うのは誰か？この状況に法はどう適用できるのか？「新たな思想の自由市場」と法体系の調和に向け、世界の事例を比較する。

大阪大学出版会

▼中田聡美著『現代中国語における「是」とモダリティ』(A5判・二七二頁・五七二〇円)
多様な用法を持ち、多くの中国語学習者を悩ませる「是」。謎多きその本質をモダリティの観点から解明する。
▼北山夕華・橋崎頼子編著／今井貴代子・川口広美・久保美奈・南浦涼介・村田一期ほか著『多文化社会の学校と教師教育―ノルウェーと日本の国際比較研究から』(A5判・二七四頁・三九六〇円)

多文化社会に直面するノルウェーとの比較研究から、多様性に対応するための教師教育改善に向けた示唆を提供する。

▼西口光一監修／神吉宇一・嶋津百代・森本郁代・山野上隆史・義永美央子編著／大平幸・佐川祥予・高橋朋子・西野藍・林貴哉・藤浦五月・藤原智栄美・松尾慎・羅曉勤著『一歩進んだ日本語教育概論―実践と研究のダイアログ』(A5判・二七八頁・二八六〇円)
実践と研究の両者を往還することで、日本語教育についての基本的な視点や姿勢を理解することを旨とする入門的概説書。

関西大学出版部

▼片桐新自著『昭和・平成・令和の大学生―大学生調査35年から見る価値観の変化』(A5判・三四四頁・二五三〇円)一九八七年から35年間5年おきに8回も「大学生の価値観」を調査してきた貴重な社会学研究の集大成。時代の影響を受け、同じ大学生とはいえその価値観は大きく変わってきたことが端的に指摘されている。「大学生を通して見る日本社会論」として価値ある一冊。

▼永田憲史著『いじめ防止対策推進法の重大事態の研究』(A5判並製・二四〇頁・二五三〇円)「いじめと法」を専門とする研究者が、いじめの重大事態の調査を抱える課題を分析した上で、調査の本来あるべき「現在」を実現するための方策として、「いじめ防止対策推進法」の改正を具体的に提案する。学校・教育委員会・いじめに関わる専門職にとって必読の書。



関西学院大学出版会

▼ジェルヴェーズ・ド・ラトゥシユ著／関谷一彦訳『カルトゥージオ会修道院の門番であるドン・B***の物語』(四六判・三二八頁・四四〇〇円)その多くが禁書のため、地下で取引され密かに読まれていたベストセラー。十八世紀フランスのリベルタン文学の代表作。初邦訳！

▼小川大和著『アメリカの協働ガバナンス―既往研究の質的統合と理論的枠組みの発展』(A5判・二八四頁・五三九〇円)アメリカにおける協働ガバナンス研究の最新の知見をベースとして、協働プロセス全体に関する理論的枠組みと協働アクター間の対等な関係性の規定要因に関する理論的枠組みを大きく発展。

▼頼政良太著『災害ボランティアの探究―アクション・リサーチによる実践研究』(A5判・二七六頁・五二八〇円)被災者とボランティアの関係が能動型／受動型の関係性から中動的な関係性へと変化があることに言及し、その(反転)は、被災者との出会い、ボランティア同士

の交流、(できること)を集める(場)づくりの中で起きていることを明らかにする。

九州大学出版会

▼竹熊尚夫編著『日本式教育の海外展開とインパクト―往還する高専／KOSENと日本式国際学校の新潮流』(A5判・三四四頁・五二八〇円)グローバル時代に即した日本の教育国際化への期待と課題を高専と日本式国際学校の海外進出の実践例から探る。

▼金徳謙著『これで使える実践Webスクレイピング―Pythonで学ぶWeb情報収集』(B5判・一九〇頁・二九七〇円)Webスクレイピングに必要な知識・考え方・具体的なスキルを身につけられる、実践的解説書。

▼勝本之晶著『現象とデータから学べる！化学熱力学』(A5判・二七二頁・三九六〇円)「使い方を身につけること」に的を絞り、熱力学自体の解説をコンパクトにした実践的テキスト。現代化学の基礎知識も豊富に盛り込む。

▼山下大喜著『中国近代における「国語科」の創成―胡適の思想的模索』(A5判・一九六頁・五一七〇円)近代的な学校教育制度の確立に胡適が果たした歴史的な役割を「国語科」カリキュラムの誕生から描き出す。

- 大同印刷(株) 〒849-0902 佐賀県佐賀市久保泉町上和泉1848-20
TEL 0952-71-8550 <https://www.daidou-jp.com>
- ダイニック(株) 〒105-0004 東京都港区新橋6-17-19 新御成門ビル
TEL 03-5402-1811 <https://www.dynic.co.jp>
- (株) 太平印刷社 〒140-0002 東京都品川区東品川1-6-16
TEL 03-3474-2821 <http://www.p-taihei.co.jp>
- (株) 太洋社 〒501-0431 岐阜県本巣郡北方町北方148-1
TEL 058-324-2111 <https://www.p-taiyosha.co.jp>
- (株) 竹尾 〒101-0054 東京都千代田区神田錦町3-12-6
TEL 03-3292-3617 <https://www.takeo.co.jp>
- (株) 東京出版サービスセンター 〒110-0016 東京都台東区台東1-33-6 セントオフィス秋葉原401
TEL 03-5688-5801 <https://www.c-enter.com/>
- (株) とうこう・あい 〒104-0061 東京都中央区銀座7-13-12 サクセス銀座7ビル4F
TEL 03-5148-7200 <https://www.toko-ai.com>
- 東光整版印刷(株) 〒135-0006 東京都江東区常磐2-12-15
TEL 03-3632-0801
- (株) トーヨー企画 〒602-0923 京都府京都市上京区油小路通中立売上ル 油橋詰町93-7
TEL 075-411-8288 <https://www.talligent.jp>
- (株) 日新広告社 〒101-0061 東京都千代田区神田三崎町2-12-10 喜久屋ビル3F
TEL 03-3263-9431 <http://www.nissinkoukokusyua.com>
- (株) 日本経済新聞社 〒100-8066 東京都千代田区大手町1-3-7
TEL 03-6256-7528 <https://www.nikkei.co.jp>
- 日本宣伝販売(株) 〒330-0856 埼玉県さいたま市大宮区三橋3-278
TEL 048-620-1021 <http://www.nihon-senden.jp>
- (株) 博報堂 〒107-6322 東京都港区赤坂5-3-1 赤坂Bizタワー19F
TEL 03-6441-6711 <https://www.hakuhodo.co.jp>
- 藤原印刷(株) 〒101-0052 東京都千代田区神田小川町2-4-5
TEL 03-3291-0191 <https://www.fujiwara-i.com>
- (株) 平文社 〒170-0005 東京都豊島区南大塚2-35-7
TEL 03-3944-0301 <http://www.heibun.co.jp>
- (株) 毎日新聞社 〒100-8051 東京都千代田区一ツ橋1-1-1
TEL 03-3212-3340 <https://www.mainichi.co.jp>
- 誠製本(株) 〒175-0081 東京都板橋区新河岸3-13-1
TEL 03-4212-2735 <http://www.makoto-seihon.com>
- (株) 遊文舎 〒532-0012 大阪府大阪市淀川区木川東4-17-31
TEL 06-6304-9325 <http://www.yubun.co.jp>
- (株) 読売新聞東京本社 〒100-8055 東京都千代田区大手町1-7-1
TEL 03-3242-1111 <https://www.yomiuri.co.jp>

一般社団法人大学出版部協会は、私たちの活動をご理解・ご支援くださる皆様による「賛助会員」制度を設けています。ここに趣旨にご賛同くださり、ご支援いただいている各社様をご紹介します。

一般社団法人 大学出版部協会 賛助会員名簿

- (株) 朝日新聞社 〒104-8011 東京都中央区築地5-3-2
TEL 03-5540-7749 <https://www.asahi.com>
- 重細重印刷(株) 〒380-0804 長野県長野市大字三輪荒屋1154
TEL 026-243-4858 <http://www.asia-p.co.jp>
- (株) アベル社 〒102-0071 東京都千代田区富士見2-2-2 東京三和ビル301
TEL 03-6256-8133 <https://www.abel-sha.com>
- 尼崎印刷(株) 〒661-0975 兵庫県尼崎市下坂部3-9-20
TEL 06-6494-1122 <http://www.ainai.co.jp>
- 英文校正エナゴ 〒101-0021 東京都千代田区外神田2-14-10 第2電波ビル4F クリムゾンインタラクティブジャパン
<https://www.enago.jp/>
- (株) A L E 〒103-0023 東京都中央区日本橋本町2-8-6 日本橋ビル4階
TEL 03-5652-8627 <http://www.adv-logi-eng.co.jp>
- 王子製紙(株) 〒104-0061 東京都中央区銀座4-7-5
TEL 03-3563-7072 <https://www.ojipaper.co.jp>
- (株) 加藤文明社印刷所 〒101-0061 東京都千代田区神田三崎町2-15-6 K-STAGE
TEL 03-3261-8281 <http://www.bunmeisha.co.jp>
- 城島印刷(株) 〒810-0012 福岡県福岡市中央区白金2-9-6
TEL 092-531-7102 <https://www.kijima-p.co.jp>
- (株) 糸川印刷 〒112-0012 東京都文京区大塚6-9-7
TEL 03-3943-9811 <http://www.kumekawa.jp>
- 港北メディアサービス(株) 〒150-0002 東京都渋谷区渋谷2-7-7
TEL 03-5466-2201 <http://www.kohoku.co.jp>
- (株) コングレゴ-バルコミュニケーションズ 〒103-0027 東京都中央区日本橋3-10-5 オンワードパークビルディング5階
TEL 03-3510-3750 <https://www.congre-gc.co.jp>
- 三美印刷(株) 〒116-0013 東京都荒川区西日暮里6-28-1
TEL 03-6807-8377 <https://www.sanbi.co.jp>
- 三立工芸(株) 〒101-0061 東京都千代田区三崎町3-2-10 寺西ビル3F
TEL 03-3261-5171 <https://www.sanritsu-net.co.jp>
- 三和印刷(株) 〒381-2226 長野県長野市川中島町今井1822-1
TEL 026-285-2300 <http://www.sanwaprinting.jp>
- 信濃印刷(株) 〒102-0072 東京都千代田区飯田橋4-1-11
TEL 03-3237-3601 <http://www.shinano-insatsu.co.jp>
- (株) 渋谷文泉閣 〒380-0804 長野県長野市三輪荒屋1196-7
TEL 026-244-7185 <http://www.bunsenkaku.co.jp>
- (株) 眞興社 〒150-0033 東京都渋谷区猿樂町19-2
TEL 03-3462-1181 <https://www.shinkousha.co.jp>
- 新日本印刷(株) 〒162-0801 東京都新宿区山吹町342
TEL 03-3269-3611 <https://www.sinnihon.net>
- (株) 精興社 〒101-0054 東京都千代田区神田錦町3-9
TEL 03-3293-3021 <https://www.seikosha-p.co.jp>
- 創栄図書印刷(株) 〒604-0812 京都府京都市中京区高倉通二条上ル天守町766
TEL 075-255-2288 <https://www.soiei-pb.co.jp>
-

2024年8月～10月新刊



ザッハー＝マゾッホ集成 (全3巻同時発売)

I エロス 収録作：「毛皮のヴィーナス 決定版」ほか3篇
ザッハー＝マゾッホ 著 平野嘉彦 / 中澤英雄 / 西成彦訳 解説：西成彦
四六判上製 556頁 定価 11,000円 ISBN:978-4-409-13042-1

II フォークロア 収録作：「ハイダマク」「民衆裁判」ほか2篇
ザッハー＝マゾッホ 著 中澤英雄 訳 / 解説
四六判上製 512頁 定価 11,000円 ISBN:978-4-409-13043-8

III カルト 収録作：「漂泊者」「サバタイ・ツェヴィ」ほか4篇
ザッハー＝マゾッホ 著 平野嘉彦 訳 / 解説
四六判上製 436頁 定価 11,000円 ISBN:978-4-409-13044-5

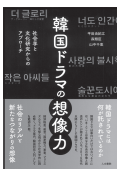


敗北後の思想

—ブロッホ、グラムシ、ライヒ

植村邦彦 著
四六判並製 214頁 定価 2,640円
ISBN:978-4-409-04128-4

社会の問題と格闘した、マルクス主義の思想家、ブロッホ、グラムシ、ライヒを振り返りつつ、エリボンやグレーバーを手がかりとして新しい時代を考える。書き下ろし。



韓国ドラマの想像力

—社会学と文化研究からのアプローチ

平田由紀江 / 森類臣 / 山中千恵 著
四六判並製 206頁 定価 2,420円
ISBN:978-4-409-24164-6

韓国ドラマは面白いだけではない。2010年代以降にヒットした韓国ドラマを、経済格差、教育、国家権力、軍事、フェミニズムなど、多様な視点から社会学的に読み解く。

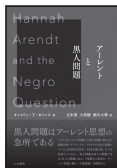


戦争はいつでも同じ

スラヴエンカ・ドラクリッチ 著
栃井裕美 訳

四六判並製 222頁 定価 3,080円
ISBN:978-4-409-24165-3

旧ユーゴ紛争を経験した著者による最新エッセイ。政治によるプロパガンダ、性暴力、難民、戦争犯罪法廷…普通の人びとの日常はどのように侵食され、隣人を憎むにいたるのか。



アーレントと黒人問題

キャスリン・T・ガインズ 著
百木漢 / 大形綾 / 橋爪大輝 訳
四六判上製 328頁 定価 4,950円
ISBN:978-4-409-03133-9

「黒人問題は黒人の問題ではなく白人の問題である」と喝破する著者が、アーレント思想に潜む「人種問題」を別括する。



フレックス・ガタリの哲学

—スキゾ分析の再生

山森裕毅 著
四六判上製 320頁 定価 4,950円
ISBN:978-4-409-03134-6

ガタリが遺した最も謎めく精神分析的実践「スキゾ分析」。独自の概念や言葉が意味するものを体系づけ、開かれたものにしてゆく。今後の研究の基礎づけに挑んだ意欲作。



移民都市

レス・バック / シャンサー・シンハ 著
有元健 / 挽地康彦 / 栢木清吾 訳
四六判並製 380頁 定価 5,280円
ISBN:978-4-409-24166-0

ロンドンの移民青年たち 30人と継続的に対話を重ね、その苦悩や格闘の軌跡をつぶさに辿る。協働的で革新的な「都市の民族誌(アーバン・エスノグラフィ)」の誕生。

人文書院 〒612-8447 京都市伏見区竹田西内畑町9 X @jimbunshoin (価格は税込)
TEL075-603-1344 FAX075-603-1814 <https://www.jimbunshoin.co.jp/>

一般社団法人 大学出版部協会 加盟出版部一覽

◎北海道大学出版会

〒060-0809 札幌市北区北9条西8丁目
北海道大学構内
TEL 011-747-2308 FAX 011-736-8605

◎弘前大学出版会

〒036-8560 弘前市文京町1番地
弘前大学附属図書館内
TEL 0172-39-3168 FAX 0172-39-3171

◎東北大学出版会

〒980-8577 仙台市青葉区片平2-1-1
東北大学構内
TEL 022-214-2777 FAX 022-214-2778

◎流通経済大学出版会

〒301-8555 龍ヶ崎市中平畑120
TEL 0297-60-1167 FAX 0297-60-1165

◎聖徳大学出版会

〒271-8555 松戸市岩瀬550
TEL 047-365-1111 FAX 047-363-1401

◎慶應義塾大学出版会

〒108-8346 港区三田2-19-30
TEL 03-3451-3168 FAX 03-3451-3124

◎専修大学出版局

〒101-0051 千代田区神田神保町3-10-3
TEL 03-3263-4230 FAX 03-3263-4288

◎玉川大学出版部

〒194-8610 町田市玉川学園6-1-1
TEL 042-739-8935 FAX 042-739-8940

◎中央大学出版部

〒192-0393 八王子市東中野742-1
TEL 042-674-2351 FAX 042-674-2354

◎東京大学出版会

〒153-0041 目黒区駒場4-5-29
TEL 03-6407-1069 FAX 03-6407-1991

◎東京電機大学出版局

〒120-8551 足立区千住旭町5番
TEL 03-5284-5385 FAX 03-5284-5387

◎法政大学出版局

〒102-0073 千代田区九段北3-2-3
法政大学九段校舎内
TEL 03-5214-5540 FAX 03-5214-5542

◎武蔵野大学出版会

〒202-8585 西東京市新町1-1-20
武蔵野大学構内
TEL 042-468-3003 FAX 042-468-3004

◎武蔵野美術大学出版局

〒187-8505 小平市小川町1-736
TEL 042-342-5515 FAX 042-342-9542

◎早稲田大学出版部

〒169-0051 新宿区西早稲田1-9-12
TEL 03-3203-1551 FAX 03-3207-0406

◎関東学院大学出版会

〒236-8501 横浜市金沢区六浦東1-50-1
TEL 045-786-5906 FAX 045-785-9572

◎名古屋大学出版会

〒464-0814 名古屋市千種区不老町1
名古屋大学構内
TEL 052-781-5027 FAX 052-781-0697

◎名古屋外国語大学出版会

〒470-0197 日進市岩崎町竹ノ山57
名古屋外国語大学内
TEL 0561-75-2503 FAX 0561-75-1723

◎京都大学学术出版会

〒606-8315 京都市左京区吉田近衛町69
京都大学吉田南構内
TEL 075-761-6182 FAX 075-761-6190

◎大阪大学出版会

〒565-0871 吹田市山田丘2-7
大阪大学ウエストフロント
TEL 06-6877-1614 FAX 06-6877-1617

◎関西大学出版部

〒564-8680 吹田市山手町3-3-35
TEL 06-6368-0238 FAX 06-6389-5162

◎関西学院大学出版会

〒662-0891 西宮市上ヶ原一番町1-155
TEL 0798-53-7002 FAX 0798-53-5870

◎九州大学出版会

〒819-0385 福岡市西区元岡744
九州大学パブリック4号館302号室
TEL 092-836-8256 FAX 092-836-8236

◎大阪経済法科大学出版部(休会)

〒581-8511 八尾市楽音寺6-10
TEL 072-941-9129 FAX 072-941-9979

【発行所】
一般社団法人 大学出版部協会
ISSN 0913-3305
振替 00170-8-389131

〒102-0073
東京都千代田区九段北1丁目14番13号
メゾン萬六403号室
TEL 03-3511-2091 FAX 03-3511-2092
E-mail : mail@ajup-net.com
URL : <https://www.ajup-net.com/>

【表紙デザイン】 奥定泰之

【表紙写真】
photo : Andrey_Popov/shutterstock.com



*本誌のバックナンバーは、大学出版部協会の公式HPでも、PDF版を全文無料でダウンロードできます

大学出版140号(2024年秋)

2024年11月1日発行

頒価100円(千共)